

紙上講座 V

沢入 塔ノ沢の仏教信仰の痕跡(1)

講師 藤井 実さん(東町花輪)

はじめに

私たちのみどり市東町は、

渡良瀬川の溪谷に沿ってあり、一万年以上前の人々の生活の痕跡や、九六〇年以上昔の安倍宗任伝説が語り継がれている地である。

また、四六〇余年前の戦国時代、上杉謙信が関東に「越山」した。勢力を拡大する北条氏康を制圧し、関東管領による関東の秩序回復が大義である。

その時の永禄四年(一五六一)の越山時、上杉陣に従臣した部将と陣幕を記録した「関東幕注文」がある。そこに桐生衆の一人として「松嶋(崎)大和守」が名を連らねている。

この武將は、安倍宗任一族の後胤と伝えられていることから、東町の出身であり、黒川郷と呼ばれるこの谷の実力者であったと思われる。

沢入塔ノ沢には仏教信仰に関わる自然や石仏・人物などの痕跡や言い伝えが興味深く残されているので紹介する。

一 大沢寺

わたらせ溪谷鐵道沢入駅そうりで下車。足尾方面に向かい沢入橋を渡り道なりにゆるやかな坂道を上りきると国道一二二号線の「沢入」の信号。左折し二百メートルほどで右側に高い石垣。そこが「曹洞宗大沢寺」。

大沢寺は、東町の最高峰袈裟丸山と平成五年群馬県指定

史跡「塔ノ沢石造釈迦涅槃像」
を中心とした仏教遺跡群への入口である。

大沢寺は、寺伝によると寛文年間(一六六一〜七二)に開かれたという。

かつては、村の小学生の遠足の目的地であり、春四月にはお祭りがあつたり、地酒の名に使われるなど、村の人々に親しまれている「寝釈像」をお守りする寺である。

遠き日の頃には、お参りした人や檀家の家々に、「お札」を頒布していたという。

そのお札には

「空海上人御開眼之天然石涅槃像塔之沢釈迦如来上野国勢多郡東村大字沢入別当大沢禅寺」

(『勢多郡東村誌』)

とあり、大沢寺が寝釈迦を守る「別当」であつたことを物語っている。

二 塔ノ沢不動滝
般若の滝・賽米の塔

大沢寺から道なりに林道を行くこと約二キロ。小中線こなかと分岐し塔ノ沢線を百数十メートルほど行くと鳥居と「大山祇之命」

「明治二十五年(一八九二)二月廿日」「炭焼有志連中」と刻された石柱がある。大山祇之命は山の神様。山で仕事する人たちの守り神である。炭焼きをする人たちが仕事の安全を願って建てた石柱だ。この石柱は、当時炭焼きが村の基幹産業であつたことを物語っている。

この石柱の手前、丸太で土留めされた急な階段状の坂を下ると、岩肌を滑り降りように落下してくる十五メートル程の「塔ノ沢不動滝」がある。

滝の傍らには一・五メートルほどの「不動明王」の石像がある。この石像には江戸時代中頃

「明和五年（一七六八）六月」と刻されている。高山彦九郎が天明二年（一七八二）沢入を訪れ『沢入道能記』を記す以前の刻である。

修験者は、本尊「不動明王」の前で、自らの靈力を高め、人身の安寧を願い、「不動滝」に打たれ一心不乱に厳しい「行」をしたのであろう。

遠い昔、不動様の前には護摩を焚いて修行に励んだ跡があつたという話があつた。今ではこの話しさえも時の中に埋もれてしまった。

東町には「不動滝」と名の付く滝が沢入の「塔ノ沢不動滝」、神戸座間「柱戸不動滝」、小中の「柏ヶ谷不動滝」の三滝ある。「東の三不動滝」とも言おう。

塔ノ沢不動滝の先一きほど先にも滝がある。糸を引いたような細長さで落下する十数

の「般若の滝」である。

「般若」というと鬼女思い浮かべるかと思うが、仏教用語で「般若」は「仏の智慧」を意味するという。

この滝に打たれて仏の智慧に触れ、「釈迦（涅槃像・寝釈迦）へ」という仏教的な繋がりをもった名の滝なのであろう。

塔ノ沢不動滝と般若の滝との間には、節理の入った柱状の岩「賽米の塔」があると岩澤正作氏は『渡良瀬峡内澤入塔見聞記』（大正十四年七月『上毛及上毛人』）と『黒川峡と澤入塔』（昭和八年毛野研究会出版）に記している。また、市HPにはその存在を名称のみ「賽米之塔」と記されている。

岩澤氏は、塔の位置と形について、「塔之澤溪中左岸丘腹に峨々として屹立する巨巖

で、北方百米許の處から望見すると、巖頭三岐して夫々塔形をなしている」とある。

塔の名の由来については、「（この先の）涅槃像と澤入

塔は、女人禁制の地であつた。そこで女人は、此の塔に米をお供えし、涅槃像と澤入塔とを遥拝して下つた。そこでこの塔を「賽米塔」と呼んだと傳へられている」と記している。

この塔は女人にとって大切な信仰の対象であつたのだ。

しかし、現在この塔の位置は推測の域にとどまつており、その特定にむけ探索を継続しているところである。

さて、般若の滝から三百ほど行くと「塔ノ沢登山道入口（駐車場）」に着く。ここから沢に沿って約二き。いよいよ「寝釈迦」への道だ。

この沢沿いの道は、溪流のせせらぎ、野鳥のさえずり、

点在する花崗岩の巨石、広葉落葉樹の木々と木もれ日など四季を通して安らぎを味わうことのできる小道だ。

途中には、昭和の初め頃まで使われていたであろう崩れかかった炭焼窯の石組が、山の仕事の痕跡として草に埋もれながら静かに残っている。

三石像釈迦涅槃像（寝釈迦）

沢を右に左にと渡り、花崗岩の岩々の合間を抜けつつ歩き行くと、急勾配の坂の上に巨岩が現れる。標高千二百余にある「不動岩」だ。

この岩の頂に全長三七〇ほどの「石造釈迦涅槃像（寝釈迦）」がまるで寝ているように横たわってござる。お釈迦様が入滅（亡くなること）された時のお姿という。

~~~~~  
次回は最終号です。